総　説

看護研究論文からみるスピリチュアリティの定義
――日本と英語圏諸国の比較検討――

鵜生川恵美子，中 西 陽 子
群馬県立県民健康科学大学看護学部

本論は，看護研究にて関心が高まっている日本と英語圏諸国のスピリチュアリティの定義についての文献による比較検討である．

1950 年代から 1970 年代の英語圏諸国において，スピリチュアリティが宗教と同一視されていた背景には，聖職者によるパストラルケアの実践がある．1980 年代から 1990 年代にかけての看護のパラダイムが，宗教的側面の強調から全人的な人間理解に係る概念へと変わった．日本への概念の導入はその後 1990 年代後半 ~2000 年以降になる．

明確な定義は見出されないものの，共通項目は次に示すとおりである．1）人間存在の根源性に関わり，全ての人間が本来持ち合わせている力．2）「自己」「他者」「超越的存在」との関連性において，人生の意味や目的を見出す力．3）危機的状況に直面した時に潜在化する．4）宗教的側面を含めるが，宗教と同一ではない．

定義の必要性の一方，英語圏諸国においては，普遍的な定義を求めることに対する非現実性を示す見解も見られる．

キーワード：スピリチュアリティ，定義，看護文献，日本，英語圏諸国，比較検討

1．緒　　言

1980 年代より Quality of Life（QOL）の概念が発達し，英国のホスピス活動と北米のがん患者の精神的ケア・スピリチュアルケアに関する研究が緩和ケア領域で発展し，その核となるスピリチュアリティの概念も発達した[1]．日本において，スピリチュアリティは，特に 1990 年代から多くの研究者により注目されるようになった概念であり，その背景には，常に病気を治そうと努力し，少しでも長生きすることが至上命であった西洋近代医学に対する疑問と反省があるといわれる[2]．

現代，医療の場でいのちの根源的問題に向き合う際，スピリチュアリティという概念は，いのちの問題をどう捉えるのか大きなヒントを与えうる重要な概念[3]である．世界保健機関（以下 WHO）は，緩和ケアの定義において，「人間は全人的な存在である」と定義[4]しており，全人的側面の一側面であるスピリチュアルな側面からの人間理解をするには，その基本概念であるスピリチュアリティを理解することが必要である．しかしながら，スピリチュアリティという概念は欧米諸国の宗教的背景から生まれた概念[5]であり，それゆえ，宗教観や言葉の相違のある日本においては，後追いにて導入されたスピリチュアリティの概念は，曖昧な言葉のニュアンスで認識されている現状があ

連絡先：〒371－0052　群馬県前橋市上沖町 323－1
群馬県立県民健康科学大学
鵜生川恵美子

る[6]．よって，先行した欧米諸国におけるスピリチュアリティの概念の変遷と，日本におけるその概念の導入の過程と概念の認識を把握することが重要である．

看護師は，どのような場面においても，患者のいのちに寄り添い，最も身近な存在として，看護を提供する義務がある．そのためには，患者の生活の質・生命の質（QOL）を考える時，全人的な存在として一人の人間を理解することが必要である．特に，患者および家族が直接的にいのちの限りと向き合う終末期医療の現場においては，全人的苦痛の理解のために，スピリチュアリティの理解が必須であると言える．この様なことを背景に，患者のスピリチュアリティ概念の重要性を把握することが必要とされ，現在，看護研究におけるスピリチュアリティに対する関心が年々高まっている．

例えば，2007 年から 2011 年までのデータベースから得られた看護研究者による文献から spirituality の定義に関する再検討を行った Reinert と Koening は, CINAHL で検索された ‘spirituality and nursing’ のキーワードによる検索文献数が，1982 年から 1991 年の間は 1 件であったのに対して，1992 年から 2001 年では 50 件，2002 年から 2011 年の間では 281 件にまで増加していることを示している[7]．2017 年 8 月現在，同様に CINAHL を用いて，‘spirituality and nursing’ をキーワードとして検索をすると，2677 件の文献を見出すことができる．

日本においても，同様のキーワード（「スピリチュアリティと看護」）でデータベースにて検索すると，2000 年，2001 年がそれぞれ 1 件であったのが，2002 年から 2004 年では 36 件，2005 年から 2017 年では 312 件にまで増加している．

このように，日本及び海外（英語圏諸国以外の国々も含まれる）おいて「スピリチュアリティと看護」及び ‘spirituality and nursing’ のキーワードによる検索文献数が増加していることから，看護領域におけるスピリチュアリティに対する関心と必要性の高まりは明白であるといえる. しかし，看護師を含む医療にかかわる人々のスピリチュアリティに対する高い関心に反して, 国内外問わず，その定義についての共通理解がほとんどないことを指摘する研究者が多いことも事実である[8–17]．

本総説では，日本と英語圏諸国（英国，米国，カナダ）の看護研究論文から見出された看護におけるスピリチュアリティの定義についての研究者による見解を俯瞰するとともに，研究者によるスピリチュアリティの定義と，その変遷及び共通性と相違性について比較検討する. このことにより，国内外のスピリチュアリティ概念の明確化とその特徴を明らかにすることへの示唆が得られ，看護の対象となる人間理解につながると考える．

2．研究論文の抽出

2017 年 8 月現在において，英語圏諸国における看護研究論文においては，CINAHL を用いて ‘spirituality in nursing’ and ‘definition’ をキーワードとして検索を行った結果，1988 年から 2015 年の間で，41 件の研究論文が抽出された．日本の看護研究論文については，医学中央雑誌を用い，「スピリチュアリティ」「看護」「定義」をキーワードとして検索すると，2000 年から 2017 年の間で，24 件の研究論文が抽出された．

これら抽出された論文には，過去数十年間に及ぶ研究者による定義に関する文献検討，複数の研究から見出された定義の再検討，再解釈なども含まれた．

本論では，日本と英語圏諸国の看護研究におけるスピリチュアリティの定義に関する看護研究論文の中から，研究者によって言及された主な定義を一覧表にまとめた．ただし，海外におけるスピリチュアリティの定義に関する看護研究論文は，

CINAHL においては 1988 年の論文が初出であるが，研究者が研究論文中で，それ以前に他の研究者が定義したスピリチュアリティの定義を引用している場合は，その原本を入手し確認したものについては，一覧に加えた．

3．看護研究論文にみるスピリチュアリティ

3.1　英語圏諸国におけるスピリチュアリティの定義

3.1.1　研究者による定義及び定義に対する見解の変遷

スピリチュアリティの概念の導入が先行する英米諸国において，過去 50 年間で看護研究論文におけるスピリチュアリティの概念や定義に関する研究はかなりの進化を遂げている．文献においてスピリチュアリティが表現されるようになったのは，1950 年代からで，初期の研究においては，スピリチュアリティは宗教と同一とみなされていた[18]．Kleidler が，看護研究論文ではほとんどの場合，スピリチュアリティという言葉は制度としての宗教と同義語として使用されていると示唆している[19] ことからもわかるように，1970 年代ごろまでは，宗教とスピリチュアリティの概念はほぼ同一のものであり，言葉や示す内容も置き換えが可能であると捉えられていたと考えられる．

看護研究論文において，主にローマカトリック教徒である患者の信仰について，そしてその後，プロテスタントとユダヤ教徒である患者の宗教へと関心が注がれるようになったのは，1950 年代から 1960 年代にかけてである[20]．看護師が患者に対して治療のために宗教的な介入を施すことが奨励されていたからである[21]．この期間，関心がほとんど注がれていなかった患者のケアにおけるスピリチュアリティに関する研究が看護研究論文にみられるようになったのは，1960 年代の終わりになってからである[22]．

宗教からスピリチュアリティへのシフトを行った先駆者の一人として，患者のスピリチュアル・ニーズを看護師が決定できるようにする基本的アセスメントツールを開発した Simsen が挙げられるが，1980 年代初めに，看護研究論文の焦点は，徐々にスピリチュアリティが持つ宗教的側面（religious aspects）からスピリチュアリティの QOL としての側面（Quality-of-life aspects）へと移行していった[23]．1980 年代から 90 年代にかけての看護におけるパラダイムシフトにより，看護研究の焦点はもはや，患者の宗教ではなくスピリチュアリティに注がれるようになったのである[24]．

Emblen による 1963 年から 1989 年の間に発行された看護研究論文における ‘religion,’ ‘spirituality’ の概念分析（concept analysis）の研究は，宗教とスピリチュアリティの二つの概念を置き替え，同義に使用することでは正確な解釈を導かないことを示唆し[25]，同一視することが不可能な異なる概念であるという見解を示した他の研究者[26–28] にとって強固な裏付けになったといえる．

20 世紀終わりには，看護研究論文に大きな変化がみられ，スピリチュアリティはもはや宗教と同一のものではなく[29]，‘body,’ ‘mind,’ ‘spirit’ に対するケアを意味するホリスティック・アプローチ（holistic approach）という観点からも捉えられるようになった[30–33]．

3.1.2　スピリチュアリティの定義に対する見解の特徴

まず一つ目の特徴として，研究者の多くは，スピリチュアリティの定義の困難さを挙げている．

1980 年代から，宗教とは分離した形で受容されてきたスピリチュアリティであるが，看護職者らは，臨床現場における不可欠な要素としての認識をもち，明確な定義が必要であると主張するものの，その定義に関しては未だ十分な同意には至っていない[34–35] というのが現状である．

Harrison は，定義づけ，及び討論の際の問題点として，言葉に対する抵抗，それを示す表現の困難さを挙げている[36]．

また，George らは，スピリチュアリティの定義や意味をめぐる複雑さの理由として，多様性，主観的，個人的性質による構造の複雑さ，宗教との互換性などを挙げている[37]．

一方，McSherry は，グランディド・セオリーを用いたスピリチュアリティの意味に関する調査の結果，スピリチュアリティの定義に使用される言葉には正確な（precise）専門用語はないとの可能性を述べ[38]，さらに，1985 年から 2002 年までの CINAHL などの電子データを使った簡単な分析からも，スピリチュアリティが個人の解釈や好みに基づき，多様な意味を含有しているために，その概念が主観的で混乱していると指摘した[39]．

次にあげられる特徴としては，研究者らの多くは，型にはめない自由な定義の必要性を述べていることである．

McSherry と Draper は，主に看護師のスピリチュアリティに対する感じ方に焦点をおいた研究の必要性を訴え，信仰，価値観，宗教的好みに関わらず，すべての人間，個人の特性に適応させることのできるスピリチュアリティの定義を発展させることが看護職者の課題であるとしている[40]．

Tanyi は，30 年間に及ぶ文献からスピリチュアリティについて 79 論文と 19 の著書による概念分析によって，今日の健康，看護に関連したスピリチュアリティの意味を明確にした．一致した定義がないのにもかかわらず，多くの看護研究者がスピリチュアリティの定義として上げているのは，「超越的存在，明かされない神秘，関係性（つながり），人生の意味や目的，より高い力，関係」であることが示唆された[41]．

Williams は，過去，多くの哲学者がスピリチュアリティについて探求し，その関心が一般の人々や患者の間でも高まりを見せていることを言及した．加えて，すべての人が経験することであるが，多くの要素を含んでいるため，それぞれのスピリチュアリティに対する経験は個々によって異なるとした[42]．

Clarke は，看護において名前が付けられた実体としてのスピリチュアリティの歴史は浅いとする．万人受けするモデルは不適切であることを認識し，実践に取り入れられるより実用的で使用者にやさしい方法に焦点を向けることによって，看護師とスピリチュアリティの関係性とその活用について探求する余地があるのだとする[43]．

同様に，Timmins と McSherry は，Royal College of Nursing（2011）[註1)] が多様なスピリチュアリティの概念を提示していることを受け，単一の権威ある定義はなく，すべてを包括する定義は，むしろ看護においては有益ではないと述べている[44]．さらに，Pike は，スピリチュアリティの定義に対する統一見解がほとんどないということが，スピリチュアリティの概念を豊かに議論し発展させることにつながると述べ，スピリチュアリティの概念の狭い制限を超えて観察することの重要性を強調した[45]．

実践神学とパストラルケアの教授である Swinton と Pattison は，スピリチュアリティの定義は幅広く，多様であるがゆえに，曖昧さを包含しているとする．スピリチュアリティを取り巻く曖昧さゆえにケアの重要な側面としての説得力に欠けてしまうと主張する批評家の意見に反し，スピリチュアリティの概念が曖昧で，明確さに欠けることこそが，政治的，社会的，及び臨床的場において強力な影響を及ぼすスピリチュアリティの強みであり，価値であると強調した[46]．

Blasdell は，研究者による多様なスピリチュアリティの定義を紹介しているが，スピリチュアリティは個々のものと捉え，普遍的な定義を求めるのは現実的ではないと言及している[47]．

3.2　日本におけるスピリチュアリティの定義

3.2.1 研究者による定義及び定義に対する見解の変遷

一方，日本においては，元来外国語であるスピリチュアリティという言葉は1990年前後に入ってきており,「宗教性」「精神性」「霊性」などと訳され，1990年代後半になり，あえて訳さない「スピリチュアリティ」という語が用いられるようになった[48].

神学者でありかつチャプレンでもあった，日本人のスピリチュアリティ研究の第一人者である窪寺が,『スピリチュアルケア入門』（2000年）[49]の中で，スピリチュアリティを,「生の危機に直面して「人間らしく」「自分らしく」生きるための「存在の枠組み」「自己同一性」が失われたときに，それらのものを自分の外の超越的なものに求めたり，あるいは，自分の内面の究極的な者に求める機能」と定義し，以降，多くの研究者がこの窪寺の定義を参考に，研究者自身での視点からスピリチュアリティの定義づけをしている[50–52]．また，窪寺は，スピリチュアリティが死，病，死別，老いなどの危機的状況と関わっており，宗教とは深い関係はあるが同じものではなく，しかし，スピリチュアリティは目に見えない超越的なものと関わっているという事を日本の多くの研究者が指摘していると述べている[53].

高橋らは，スピリチュアリティの世代間比較の研究（2004）において,「スピリチュアリティの本質は，人生の意味や死の恐怖，神の存在の探求など，人間存在の根底に関わる人間自身の内面性であり,全ての人間が共通にもつ生命の根源である」と定義し，スピリチュアリティの概念には宗教的側面が含まれているものの，宗教性とは同一のものではないことを示唆している[54].

3.2.2 スピリチュアリティの定義に対する見解の特徴

日本においても同様に，まず一つ目の特徴として，研究者の多くは，定義の困難さを挙げている．

竹田は，日本においてスピリチュアリティという用語が日常生活の中で用いられることがほとんどないことも関係して，スピリチュアリティ研究を進めていくうえでの最初の障壁になっていることを指摘している[55].

加えて，spiritualityは,「霊性」「精神性」と訳され,「心」「霊魂」などのといった目に見えない側面を持つとともに,「宗教（上）の」「教会」のなど，宗教的なニュアンスを含んだ言葉であるため，その訳語の限界も相俟って日本人の感覚に沿いにくいと示唆している[56].

田崎らは，宗教を持たない人が多い日本人にとって，宗教的な側面を含むスピリチュアリティ観の個人差が大きいと指摘[57]し，藤井は，宗教的背景も含めた日本人の文化を反映したより精度の高いスピリチュアリティ概念構造の解明が課題であると述べている[58].

日本において，定義の困難さに起因する要素の一つとして挙げられる点は，宗教と同義語ではない「スピリチュアリティ」の訳語の問題があると考えられる．

小楠は，spiritualityの訳語の変遷を整理し，1980年代まではキリスト教を背景にしてspiritualityをとらえ，その必要に応じて役割を果たすのはいわゆる宗教家である牧師であるとされ，宗教家が行うパストラルケアにおいてspiritualityを「宗教的」と訳されることが多かったと示している[59]．その後，1980年代後半から仏教の立場からの意見もみられるようになり，日本人にとってのspiritualityについても注目されるようになり,「宗教的」に加えて「霊的」という言葉が用いられるようになったと示唆している[60].

また，宗教学研究家である安藤は，日本におい

て現在スピリチュアリティという語は，宗教や宗教性とは区別された形で用いられていることを指摘している[61]．その理由として，WHO の「“生きていること”がもつ霊的な側面には宗教的な因子が含まれていが，“霊的”は“宗教的”と同じ意味ではない」という見解[62]や，日本語における「霊性」には霊魂・幽霊などの意味が含まれることから誤解を招く可能性があること，スピリチュアルという言葉が持っている深さや広がりを的確に表す日本語が存在しないことを挙げている[63]．

次に挙げられる特徴として，多様性を持つ概念としてスピリチュアリティが捉えられている点である．

WHO は，スピリチュアリティを「人間として生きることに関連した経験的一側面であり，身体感覚な現象を超越して得た体験を表す言葉である」と定義[64]し，窪寺は，「人間的に生得的に備わっているもの」[65]であるとしている．このような見解からすると，スピリチュアリティは，人間存在の根源性に関わる概念であり，全ての人が有するものであると捉えることができる．

しかし，小藪は，日本ではスピリチュアリティやスピリチュアルケアの研究や実践が，主に死と向かい合っている終末期の患者を対象に行われてきた背景から，同じ看護師であっても，活動する場の違いによる差が大きいことを指摘している[66]．また，田崎らは，特定の宗教を持たない人が多い日本人のスピリチュアリティ観は個人差が大きいと指摘している[67]．また，高橋らは，日本人の持つスピリチュアリティ概念は，年齢によって異なる様相を持つことを指摘し，日本の高齢者はスピリチュアリティと宗教性とを同一視せず，他の年代よりもより具体的な俗的な日常概念として捉えていることを明らかにしている[68]．

4．日本と英語圏諸国におけるスピリチュアリティの定義

看護研究論文から得られた，研究者による主なスピリチュアリティの定義及び概念について表 1 の通り示す．

5．日本と英語圏諸国におけるスピリチュアリティの定義の変遷と共通性・相違性

スピリチュアリティの概念の導入が先行している英語圏諸国において，看護におけるスピリチュアリティの定義について，研究者の見解を俯瞰した結果，1950 年代から 1970 年代の初期の研究においては，スピリチュアリティは宗教と同一のものとみなされており，スピリチュアリティと宗教は置き替え可能であると捉えられていたことが明らかになった．キリスト教を背景にもつ欧米において，1920 年代からパストラルケアが病院において実践の場面で活用され始めた[95]．パストラルケアとは，キリスト教会の信者への信仰上の配慮として実施されてきた聖職者によって執り行われる「魂のケア」である[96]．1960 年代にパストラルケアと心理学との接近が図られ，心理学者である Pruyser がスピリチュアルな側面への診断の必要性を表明し，パストラルケアにおけるスピリチュアリティアセスメントの研究が大きく発展した[97]．欧米諸国では，この様な文化的・宗教的背景の影響を受け，初期の看護研究ではスピリチュアリティの定義への見解の特徴として，スピリチュアリティと宗教の同一視がされたのではないかと考える．

その後，1980 年代から 1990 年代にかけての看護のパラダイムシフトにより，スピリチュアリティの概念は，宗教的側面の強調から，全人的な人間理解のもとに QOL に関連する概念へと捉えられるようになった．表 1 においても，1999 年

表１　主なスピリチュアリティの定義の抜粋（英語圏諸国における定義の和訳：筆者による）

年	研究者	定　　義	研究者	定　　義
1970	Vaillot, M.C.	必ずしも宗教を意味せず，心理的なものを含み，生物学的および機械的なものとは対峙する私たちを動かす力の特性，あるいは私たちに影響を及ぼす不可欠な原理[69]		
1980	Ellis, D.	神との力学的，及び個人的な関係を持つという特性[70]		
1988	Labun, E.	人間間のインターパーソナルな関係，また別の領域との超越的な関係を通じて表現される関係性の性質を持つ．愛，希望，信用の存在を証明する感情，またその中で，ある人生の意味，存在の理由を提供する[71]		
1992	Reed,P.G.	個人に力を与え，価値を下げることなく，自己を超える側面との関連性を通じて意味を見出す特質．ここでの関連性とは，個人の中でのつながり，他者や自然環境におけるつながり，また，不可視の存在である神（God）との関連性の中で経験される[72]		
1995	Goddard, N.C.	どのような状況であろうと，様々な状況において証明される人生に対するアプローチ[73]		
1999	Narayanasamy, A.	すべての個人の中に存在し，神との関連性や究極の現実，優れたものとしての個人の価値から由来する内なる平和や力[74]		
2001	Carroll, B.	存在している人間の内なる本質，個別に存在するのではなく身体と心の統合された部分として存在する．他者，世界，宇宙との係り合いの中に存在し，独立して存在するものではない[75]		
2002	O’Hara, D.P.	人々の考え，行動や生き方を活気づけ人間の存在における自己，相互，他者の側面を統一する基本的な人間の力[76]	藤井美和	「人間は，病気の有無に関わらず，存在意義や生きる意味を探しながら生きている」という人間存在の根源性に関わる概念[77]
2003			岡本宣雄	人が人生の課題に直面した時に，その困難な中においても生が肯定され，安らぎや希望が与えられるために，自己を超越したものに結びつけ，また，存在の意味や生きる目的を見いださせる活力[78]
			生方怜奈 徳丸定子	宗教ではなく個人的な宗教性に通じるものとして，“目に見えない『いのち』のつながり”について扱うもの[79]
2004	Narayanasamy, A.	私たちを他者や周囲の人々とつながるよう動かす内なる側面．私たちに意味や目的を探求し，他者との積極的で信頼のある関係を築くように動かすもの．私たちを成長としての旅路に導くもの[80]	鶴若麻里 岡安大仁	宗教や宗教性よりは広い概念であり，人間存在の根本をなすものと関連し，生きる意味や目的，価値などに関わるもの[81]
			安藤満代	人が何らかの苦難や困難に遭遇した時，今まで拠り所としていた価値や信念に疑問を感じ，自分の存在や人生について問うようになること[82]
			小楠範子	人間に本来備わっており，人生の節目となる出来事において覚醒するもの．「自己」「他者」「自分の力を超える大きなもの」との関係性を有し，これらの関係性を基盤とし，「生きる意味・目的」「死や苦しみの意味」について探求する特質をもつ[83]
2005			河　正子	個人の生きる根源的エネルギーとなるものであり，存在の意味に関わる．したがって，そのありようは，個人の全体的機能，すなわち，個人の身体的，心理的，社会的領域の基盤として各側面の表現形に影響を及ぼす[84]
2006	Williams, D.M.	人間あることの本質．総合的なエネルギーであり，人生の意味や幸福に対する超越的な要求．最終的に健康や苦痛の緩和へつながる探求[85]		
2007	Sessanna, L.,Finell,D. & Jezewsli,M.A	1）信念や価値についての宗教的組織　2）人生の意味，目的，他者との関連性 3）信念や価値についての宗教とは関係ない組織　4）比ゆ的，超越的な現象[86]		
2009			小藪智子，他	生きることに深くかかわるもの，生きることを支えるものである．生きる意味や目的，自己の存在や死，超越者や自然など大いなるものとの関係に関連している．全ての人間に備わっているものであり，人間存在の書くとなるもの[87]
			今西二郎	幸福感や生きる喜び，生きる力，生への畏敬，自我の存在感，生きる意欲など．また，自然に対する畏敬の念や，自然との共生感，自然の中での自我の存在などがさらに上位の概念として続く．さらに宗教的な意味合いをもつ[88]
			中村雅彦	人々の日常生活における体験，信念，態度，価値観の反映された多様な心理的変数であり，それは人々にとって必ずしも自覚され，意識されているとは限らない「潜在因子」[89]
2010			本郷久美子，他	人を一つに統合する力で，人間の生き方の根源にかかわる，普遍的に与えられている生命の本質である．人間の内的・外的環境，超越的存在との関係の中で，目覚めながら機能していくもの[90]
2013			岡本宣雄	人間が生来的にもち超越的なものとの関係のなかで，自己の存在のうちに意味を見出す人間の生の側面[91]
2014			進藤伸一	個人が生きる意味や目的を探求すること[92]
2015	Rogers, M., & Wattis, J	患者であろうと，看護師であろうと，個人が病気や危機的状態に遭遇した時に弱気な気持ちになった時に特に重要なものとなる希望や人生の意味や目的を見出す方法[93]	山崎章郎	人生の危機に直面して『人間らしく』『自分らしく』生きることを支えてきた根拠である．それまでの自己と他者との関係性の在り様では，自己が肯定できなくなった時，自分の外の大きいものに新たな拠り所を求めたり，内省を深めることによって，過去から現在に至る，自己と他者との関係性の在り様を吟味・見直し，その結果出現した自己と他者との新たな関係性の在り様を通して，その状況での自己を肯定しようとする機能[94]

Narayanasamy の定義に「神との関連性」という表現がみられるのを最後に，それ以後の定義においては「超越的存在」という表現はあるものの，明確に「神」（God）という表現が見られなくなった．

日本における変遷を概観すると，スピリチュアリティの概念が導入された時期を裏付けるように，定義の表出は 2000 年以降であり，日本における定義では既に宗教と同一視して捉える傾向はないことが明らかになった．

日本，及び英語圏諸国におけるスピリチュアリティの定義の共通性・相違性を概観すると，共通してみられる用語は「自己」「他者」「超越的存在」であり，共通点の一つ目として，人間存在の根源性に関わる概念であり，全ての人間が本来持ち合わせている力であるということがあげられる．二つ目として，「自己」「他者」「超越的存在」との関連性を基盤として，人生の意味や目的を見出す力であるとしている．三つ目として，普段は潜在化しているが，危機的状況に直面した時に潜在化するものとして捉えていることが挙げられる．四つ目として，宗教的な因子が含まれているが，宗教とは同一のものではなく，区別している点である．一方，相違点として，英語圏諸国における看護研究論文においては，普遍的な定義を求めることの非現実性を述べていることも明らかになった．このような視点は，日本の研究論文には見られなかった視点である．スピリチュアリティの定義に関する統一見解がないことが，スピリチュアリティの概念を豊かに議論し発展させることにつながると論述しており，今後のスピリチュアリティ研究への重要な視点を示していると考える．

日本においても英語圏諸国においても，スピリチュアリティの概念については，いまだ定まった定義は見出せていないという現状がある．スピリチュアリティは，個人によって異なる相対的な概念であり，個人の背景にある文化や環境に影響を受けるという特徴があると考える．環境は，人間の営みの場であり，人間の価値観を形成し文化を築く重要な側面の一つでもある[98]．よって，個人の持つ文化や，置かれている環境によってスピリチュアリティが影響されるという前提に立ち，概念の定義をする必要性があると考える．

6．限界と展望

本論では，看護研究論文においてスピリチュアリティがどのように定義されているかを検討するために，「看護」「スピリチュアリティ」「定義」の 3 つのキーワードに絞り，関連ワードを追加しての文献検索は行っていない．そのため，取り扱った論文の件数が少なく，一般化はできないが，看護におけるスピリチュアリティについての捉え方の変遷，及びスピリチュアリティの定義や概念の概要を把握する一助となったのではないだろうか．今後はさらに，看護におけるスピリチュアリティに関する研究論文や書籍を精読し，新しい知見を基に看護におけるスピリチュアリティの在り方についてあらゆる側面から模索していきたいと考える．

註

1）論文中で示された Royal College of Nursing (RCN)（2011）は，2011 年に RCN が出版している看護におけるスピリチュアリティについてのポケットガイド（Spirituality in nursing care：a pocket guide）の冊子のことである．

参考文献

1）石井八惠子，片岡智子（2003）：文献からみるスピリチュアリティへの関心の高まり，ホスピスケアと在宅ケア，11 (3)：288

2）藤井美和, 大村英明, 窪寺俊之, 他編集（2010）：

生命倫理における宗教とスピリチュアリティ：16，晃洋書房
3）柏木哲夫（2007）：終末期医療をめぐるさまざまな言葉，総合臨床，56 (9)：2744
4）World Health Organization:「WHO Definition of Palliative care」: http//www.who.int/cancer/palliative/definition/en/
5）Pruyser, P. (1976): The minister as diagnostician: Personal problem in pastoral perspective, Philadelphia: The Westminster Press. 60-79
6）藤井美和, 李　政元, 田崎美弥子, 他（2005）：日本人のスピリチュアリティの表すもの：WHOQOLのスピリチュアリティ予備調査から，日本社会精神医学雑誌，14 (1)：5
7）Reinert, K.G., Koening, H.G. (2013): Re-examining definitions of spirituality in nursing research. *Journal of Advanced Nursing,* 69 (12): 2627
8）McSherry, W., Cash, K. (2004): The language of spirituality: an emerging taxonomy. *International Journal of Nursing Studies*, 41: 152
9）MacLaren, J. (2004): A kaleidoscope of understandings: spiritual nursing in a multi-faith society, *Journal of Advanced Nursing,* 45 (5): 457
10）Sartori, P. (2010): Spirituality 1: should spiritual and religious beliefs be part of patient care? *Nursing Times,* 106 (28): 2 http://www.nursingtimes.net/nurse-managers/spirituality-1-should-
11）Pike, J. (2011): Spirituality in nursing: a systematic review of the literature from 2006-10. *British Journal of Nursing*, 20 (12): 745
12）前掲書 3)：2623
13）Rogers, M., Wattis, J. (2015): Spirituality in nursing practice. *Nursing Standard*, 29 (39): 52
14）前掲書 1)：288
15）高橋正美，井出　訓（2004）：スピリチュアリティの意味　―若・中・高齢者の 3 世代比較による霊性・精神性についての分析―，老年社会科学，26 (3)：296
16）小楠範子（2004）：スピリチュアリティの概念の検討，臨床死生学，9：1-8
17）進藤伸一（2014）：リハビリテーションのための修正ICF（国際生活機能分類）モデルの検討，秋田大学保健学専攻紀要，22 (1)：72
18）Blasdell, N.D. (2015): The Evolution of Spirituality in the Nursing Literature. *International Journal of Caring Sciences*, 8 (3): 756
19）Kleidler, M.C. (1978): Meaning in suffering: a nursing dilemma. Unpublished doctoral dissertation, Teacher College, Columbia University, New York Labun, E. (1988): Spiritual care: an element in nursing care planning, *Journal of Advanced Nursing,* 13：314 中に引用
20）前掲書 18)：757
21）前掲書 18)：757
22）前掲書 18)：758
23）Simsen, B. (1976): Spiritual dimension. *The New Zealand Nursing Journal,* 69 (1)：12-14 前掲書 14)：758 中に引用
24）前掲書 18)：761
25）Emblen, J.D. (1992): Religion and Spirituality Defined According to Current Use in Nursing Literature. *Journal of Professional Nursing,* 8 (1): 44
26）Harrison, J. (1993): Spirituality and nursing practice. *Journal of Clinical Nursing,* 2: 211
27）Goddard, N.C. (1995): 'Spirituality as integrative energy' : a philosophical analysis as requisite precursor to holistic nursing practice. *Journal of Advanced Nursing*, 22: 809
28）前掲書 11)：746
29）前掲書 18)：756
30）Labun, E. (1988): Spiritual care: an element in nursing care planning, *Journal of Advanced*

Nursing, 13: 314
31）前掲書 27)：814
32）Narayanasamy, A. (1999): A review of spirituality as applied to nursing. *International Journal of Nursing Studies,* 36: 118-119
33）前掲書 8)：151
34）前掲書 27)：810
35）Sessanna, L., Finnell,D., and Jezewski, M.A. (2007): Spirituality in Nursing and Health-Related Literature :A Concept Analysis. *Journal of Holistic Nursing*, 25 (4): 252
36）前掲書 26)：216
37）George, L.K., Larson, D.B., Koenig, H.G. and McCullogh, M.E. (2000): Spirituality and Health: What We Know, What We Need to Know. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 19 (1): 103
38）McSherry, W., Cash, K., Ross, L. (2003): Meaning of spirituality: implications for nursing practice. *Journal of Clinical Nursing*, 13: 939
39）前掲書 8)：154
40）McSherry, W., Draper, P. (1998): The debates emerging from the literature surrounding the concept of spirituality as applied to nursing. *Journal of Advanced Nursing*, 27: 690
41）Tanyi, R.A. (2002): Towards clarification of the meaning of spirituality. *Journal of Advanced Nursing,* 39 (5): 501-502
42）Williams, D.M. (2006): Putting a puzzle together: making spirituality meaningful for nursing using an evolving theoretical framework. *Journal of Clinical Nursing*, 15: 812
43）Clarke, J. (2009): A critical view of how nursing has defined spirituality. *Journal of Clinical Nursing*, 18: 1672
44）Timmins, F, McSherry, W. (2012): Spirituality: the Holy Grail of contemporary nursing practice. *Journal of Nursing Management,* 20: 952
45）前掲書 11)：748
46）Swinton, J., Pattison, S. (2010): Moving beyond clarity: towards a thin, vague, and useful understanding of spirituality in nursing care. *Nursing Philosophy,* 11: 226
47）前掲書 18)：760
48）安藤泰至（2008)：「スピリチュアリティ」概念の再考, 東洋英和女学院大学死生学研究所編, 死生学年報 4 巻，7，東京
49）窪寺俊之（2000)：スピリチュアル入門，第 1 版，16-37，三輪書店，東京
50）鶴若麻里，岡安大仁（2004)：リビングウィルへのスピリチュアリティの関連性の検討，臨床死生学，9 (1)：10
51）小藪智子, 白岩千恵子, 竹田恵子, 他（2009)：スピリチュアリティの認知の有無と言葉のイメージ　―緩和ケア病棟の看護師，一般病棟の看護師，一般の人，大学生の特徴―，川崎医療福祉学会誌，19 (1)：60
52）山崎章郎（2015)：スピリチュアルペインとケア　―その良き理解のためにスピリチュアリティを定義する―，死の臨床，38 (1)：26-27
53）窪寺俊之（2005)：スピリチュアルケアとは何か，心の臨床，24 (2)：164-165
54）前掲書 15)：296-297
55）竹田恵子，太湯好子（2006)：日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討，川崎医療福祉学会誌，16 (1)：57
56）前掲書 55)：54
57）田崎美弥子，松田正巳，中根充文（2001)：スピリチュアリティに関する質的調査の試み　―健康およびQOL の概念のからみの中で―，日本醫事新報，4036：24-32
58）前掲書 6)：11
59）前掲書 16)：5
60）前掲書 16)：6-7
61）前掲書 48)：7

62）世界保健機構編，武田文和訳（1995）：がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア：48，金原出版，東京
63）稲葉裕（2000）：スピリチュアルの邦訳についての考察，ターミナルケア，10 (2)：94-96
64）前掲書 62）：48
65）窪寺俊之（2004）：スピリチュアルケア学序説，第 1 版：8，三輪書店，東京
66）前掲書 51）：67-69
67）前掲書 57）：24-32
68）前掲書 15）：296
69）Vaillot, M.C. (1970): The Spiritual Factors in Nursing. *Journal of Practical Nursing*, 20: 30
70）Ellis, D. (1980): Whatever happened to the Spiritual Dimension? *The Canadian Nurse*, 76: 42
71）前掲書 30）：315
72）Reed, P.G. (1992): An Emerging Paradigm for the Investigation of Spirituality in Nursing. *Research in Nursing & Health*, 15: 350
73）前掲書 27）：809
74）前掲書 32）：123-124
75）Carroll, B. (2001): A phenomenological exploration of the nature of spirituality and spiri-tual care. *Mortality*, 6 (1): 95
76）O' Hara, D.P. (2002): IS THERE A ROLE FOR PRAYER AND SPIRITUALITY IN HEALTH CARE? *Complementary and Alternative Medicine,* 86: 42
77）前掲書 6）：4
78）岡本宣雄（2003）：高齢者のスピリチュアルな課題に関する研究　―高齢者へのアンケート調査から―，キリスト教社会福祉学研究，35：37-38
79）生方玲奈，得丸定子（2003）：「いのち教育」におけるスピリチュアリティについて　―定義の考察と CD-ROM 教材の開発―，死の臨床，26 (2)：250
80）Narayanasamy, A. (2004): The puzzle of spirituality for nursing: a guide to practical assessment. *British Journal of Nursing,* 13 (19): 1140
81）前掲書 50）：9-10
82）安藤満代（2004）：末期がん患者に対するライフレビュー・インタビューの試み，カウンセリング研究，37 (3)：221-231
83）前掲書 16）：1-8
84）河正子（2005）：スピリチュアリティ，スピリチュアルペインの探求からスピリチュアルケアへ，緩和ケア，15 (5)，368-369
85）前掲書 42）：813
86）前掲書 35）：255-7
87）前掲書 51）：60
88）今西二郎（2009）：次世代型統合医療とバイオフィードバック，バイオフィードバック研究，36 (2)，153
89）中村雅彦（2009）：スピリチュアリティ（霊性）概念の再検討　―市井の人々が語る日本的なスピリチュアリティの定量的，定性的分析のパラダイム―，http://homepage3.nifty.com/yahoyorodu/rsts.htm
90）本郷久美子（2010）：我が国の看護領域におけるスピリチュアリティに関する文献的考察，三育学院大学紀要，2 (1)：54
91）岡本宣雄（2013）：高齢者の Spiritual well-being の概念の位置づけとその特徴，川崎医療福祉学会誌，23 (1)：38
92）前掲書 17）：74
93）Rogers, M., Wattis, J. (2015): Spirituality in nursing practice. *Nursing Standard*, 29 (39): 51
94）前掲書 52）：26-27
95）岡本宣雄（2010）：スピリチュアリティを焦点としたケアのアプローチモデルに関する研究　―パストラルケアにおけるアセスメントの研究史から―，川崎医療福祉学会誌，20 (1)：90-91

96）前掲書 95)：90

97）前掲書 95)：92

98）中谷啓子，島田涼子，大東俊一（2013)：スピリチュアリティの概念の構造に関する研究―「スピリチュアリティの覚醒」の概念分析―，心身健康医学，9 (1)：38

Definitions of Spirituality in Nursing Literature from Japan and English-speaking Countries:

A Comparative Review Study

Emiko Ubukawa, Yoko Nakanishi
Gunma Prefectural College of Health Sciences

This paper aims to provide a comparative overview of definitions of spirituality in the nursing literature from Japan and three English-speaking countries (the United Kingdom, the United States and Canada).

Much of the nursing literature selected in this paper includes research on definitions of spirituality suggested by individual researchers, review studies on definitions mentioned by previous researchers and researchers' opinions of spirituality.

As indicated by one research paper, from the 1950s to the 1970s, spirituality in the target countries was regarded as the same as religion under the influence of pastoral care offered by priests in medical settings. From the 1980s to the 1990s, the paradigm in the nursing field shifted from the religious dimension to the holistic dimension of human beings. The concept of spirituality was introduced in Japan between the late 1990s and the early 2000s.

The findings of our research indicate difficulties in conceptualizing spirituality in the nursing field because of its ambiguity and conceptual confusion.

Despite the increased interest in spirituality, there has been little agreement over its definition. However, the traits common in definitions of spirituality as suggested by many researchers are as follows: 1) the innate power all individuals possess; 2) an essential, integrative energy which could drive us to search for the meaning or purpose of life in relationships with 'self,' 'others,' and 'transcendence;' 3) the potential power we find when people are faced with difficulties or crises; and 4) spirituality has been associated with religion but is not the same as religion.

Many nursing researchers have stated it is necessary to define spirituality for better practice in the nursing field while others find it unnecessary to define spirituality due to its uniqueness to individuals.

Keywords: spirituality, definition, nursing literature, comparative review research, Japan, English-speaking countries